

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
2016 年度フィールドネット・ラウンジ企画 シンポジウム

「毒」のバイオグラフィー

学際的な知の交差を通じて
現代世界のフィールドワーク手法を考える

The Biography of Poison: Reconsidering Fieldwork Methods in the
Contemporary World through Interdisciplinary Approaches

《報告書》

企画責任者 下田 健太郎（日本学術振興会・お茶の水女子大学）
アドバイザー 棚橋 訓（お茶の水女子大学）
日時 平成 29 年 1 月 21 日（土）13：00－18：30
場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 303 大会議室

「毒」のバイオグラフィー

学際的な知の交差を通じて
現代世界のフィールドワーク手法を考える

現代世界を生きる私たちはさまざまな「毒」にとり囲まれている。それはつねに害をなす存在であるとはかぎらず、時代や社会的状況、知識のありかたに応じて生みだされる存在である。本シンポジウムでは、「毒」という存在がダイナミックに変成・転換してゆくプロセス—生の軌跡—を「毒」のバイオグラフィーと呼び、専門や地域を異にする若手研究者によるフィールドワークの成果を交差させることで、現代世界をとらえる新視角の捕捉をめざす。

プログラム

- 13:00 趣旨説明
- 13:20 長岡 慶 (京都大学)
ヒマラヤ地域における毒/薬 —インド北東部タワンの毒盛りとトリカブトをめぐる実践
- 13:50 大石 高典 (東京外国語大学)
カメルーン東南部熱帯雨林における魚毒漁 —「毒が効かない」ということの解釈をめぐる
- 14:20 吉田 真理子 (オーストラリア国立大学)
牡蠣と人の関わりをめぐる「毒」の比較、知識実践
- 15:05 関山 牧子 (東京大学)
インドネシア西ジャワ農村における化学物質導入と住民の認識
- 15:35 下田 健太郎 (日本学術振興会)
「毒」を消化/昇華する —水俣病と共に生きる人びとのライフヒストリーを通して
- 16:05 上杉 健志 (岡山大学)
枯葉剤は毒ではない? —ブルックリンとアルーイでの毒概念のギャップと汚染
- 16:50 コメント 棚橋 訓 (お茶の水女子大学)、山口 徹 (慶應義塾大学)
- 17:20 総合討論

2017年1月21日(土) 13:00~18:00

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所3階 大会議室(303)

アクセス: <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/access>

※事前登録不要・参加無料

主催: 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)

問い合わせ先: 下田 健太郎(企画責任者) basicchannel7@gmail.com

目次

- プログラム・・・1
- 趣旨・・・2
- セッションⅠ あわい（間）を生きる「毒」
 - ・ヒマラヤ地域における毒／薬 —インド北東部タワンの毒盛りとトリカブトをめぐる実践（長岡 慶）・・・5
 - ・カメルーン東南部熱帯雨林における魚毒漁 —「毒が効かない」ということの解釈をめぐって（大石 高典）・・・6
 - ・牡蠣と人の関わりをめぐる〈毒〉の比較、知識実践（吉田 真理子）・・・7
- セッションⅡ 「毒」の新たな相貌
 - ・インドネシア西ジャワ農村における化学物質導入と住民の認識（関山 牧子）・・・8
 - ・「毒」を消化／昇華する —水俣病と共に生きる人びとのライフヒストリーを通して（下田 健太郎）・・・9
 - ・枯葉剤は毒ではない？ —ブルックリンとアルーイでの毒概念のギャップと汚染（上杉 健志）・・・10
- セッションⅢ 「毒」をめぐる学際的な知の交差
 - ・コメント①（棚橋 訓）・・・11
 - ・コメント②（山口 徹）・・・13
 - ・総合討論・・・15
- 実施報告・・・25
- 謝辞・・・29

●プログラム

Program

- 13:00-13:05 開会の辞 児倉 徳和 (東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所)
13:05-13:20 趣旨説明 下田 健太郎 (日本学術振興会・お茶の水女子大学)

セッションⅠ：あわい(間)を生きる「毒」

- 13:20-13:50 長岡 慶 (京都大学／文化人類学)
「ヒマラヤ地域における毒／薬——インド北東部タワンの毒盛りとトリカブトをめぐる実践」
13:50-14:20 大石 高典 (東京外国語大学／歴史生態学)
「カメルーン東南部熱帯雨林における魚毒漁——「毒が効かない」ということの解釈をめぐる」
14:20-14:50 吉田 真理子 (オーストラリア国立大学／文化人類学)
「牡蠣と人の関わりをめぐる〈毒〉の比較、知識実践」
14:50-15:05 休憩

セッションⅡ：「毒」の新たな相貌

- 15:05-15:35 関山 牧子 (東京大学／人類生態学)
「インドネシア西ジャワ農村における化学物質導入と住民の認識」
15:35-16:05 下田 健太郎 (日本学術振興会・お茶の水女子大学／歴史人類学)
「「毒」を消化／昇華する——水俣病と共に生きる人びとのライフヒストリーを通して」
16:05-16:35 上杉 健志 (岡山大学／文化人類学)
「枯葉剤は毒ではない？——ブルックリンとアルーイでの毒概念のギャップと汚染」
16:35-16:50 休憩

セッションⅢ：「毒」をめぐる学際的な知の交差

- 16:50-17:05 コメント① 棚橋 訓 (お茶の水女子大学／文化人類学)
17:05-17:20 コメント② 山口 徹 (慶應義塾大学／歴史生態学・考古学)
17:20-17:55 総合討論
17:55-18:00 閉会の辞 下田 健太郎

●趣旨

Introduction

下田 健太郎（日本学術振興会・お茶の水女子大学）

1. 企画の概要

現代世界を生きる私たちはさまざまな「毒」にとり囲まれている。それは常に害をなす存在であるとは限らず、薬として、あるいは狩猟や儀礼のための道具としても用いられてきた。つまり、「毒」は時代や社会的状況、知識のありかたに応じて生みだされる存在である。たとえば、それは不可視の毒として見いだされ、同定され、人間の文脈に応じてさまざまに利用されてきた。とすれば、ここには時間の流れが存在する。そこで本シンポジウムでは、「毒」という存在がダイナミックに変成・転換してゆくプロセスを「毒」のバイオグラフィーと呼び、専門や地域を異にする若手研究者によるフィールドワークの成果を交差させることで、現代世界をとらえる新視角の捕捉をめざした。

19世紀以降の有機合成化学の発展は、工業の発達をうながす一方で、従来存在しなかった多種類の「毒」をつくりだすことを可能にした。そこで使用・副生される「毒」は権力とも結びつきながら私たちの生活に密かに侵入し、さらには地球環境全体への大きな脅威にもなっている。こうした状況を受け、医学や毒性学だけでなく、人文社会科学でも「毒」に関する研究が蓄積されてきたが、その成果は異分野間で十分に共有されてこなかった。しかし「毒」が遍在する現代世界にあって、学際的に知を交差させ、「毒」の新たな相貌を描き出していくことは緊喫の課題であると言える。そのためにはフィールドワークが重要な方法となる。というのは、フィールドに分け入ってみると、必ずしも「毒」は自明なものではなく、時代や地域によって異なる文脈で様々な「毒」が生起し、生きものや人びとと関係を取り結んでいる具体的な様子が浮かび上がってくるからである。

2. 「毒」のバイオグラフィー

本シンポジウムで提示する「毒」のバイオグラフィーという視点は、1980年代に新たに興隆した「物質文化研究 (material culture studies)」と呼ばれる潮流からその着想を得ている。とくに、多くの論者がその端緒として位置づける『モノの社会生活 (The Social Life of Things)』(1986) は示唆的である。この著作が画期的だったのは、社会的なやりとりを人間同士の相互作用へと縮減しがちだった従来の研究動向に対し、モノそれ自体を焦点化した点にある。たとえば、同論集に寄稿した I. コピトフは、「モノのバイオグラフィー (biography of things)」という方法論を提唱しつつ、時間の経過に伴うモノの変容に焦点をあてている (Kopytoff 1986)。モノは物質的に生みだされるだけでなく、ある時点で人に加工され、使用され、廃棄され、さらには再利用される。そしてその過程で、特定の文化的カテゴリーのなかに位置づけられる、あるいは諸々のカテゴリーの間を移動する。こうして、「モノのバイオグラフィー」は、モノが描き出す軌跡のなかに、社会的・文化的なコンテク

ストの移ろいを浮かび上がらせる。

本シンポジウムではこの方法論を拡張し、モノに付与される意味の変動だけでなく、モノそれ自体の働きを時間の流れのなかに捉えてゆくための視点として位置づけ直すことにした。そもそも、バイオグラフィー (biography) とは、ラテン語の *biographia* に由来する語で、「生命」、「生物」、「人生」を意味する *bio* と、「書くこと」、「記述 (したもの)」を指す *graphia* の混成語である。したがって、この語は、「生命のありようをいかに対象化して書きとめるか」、というニュアンスを含んでいる。事実、「毒」はその生物活性によって生体に働きかける存在であり、さらには時間とともにその姿かたちを変えていく。したがって「毒」をめぐる意味づけの変化のみならず、「毒」という存在がダイナミックに変成・転換してゆくプロセス—の軌跡—を描き出していくことが重要となる。

3. なぜ「毒」なのか？

冒頭で触れたように、「毒」は、単に害をなす存在であるとは限らない。この点に関して興味深いのは、インド＝ヨーロッパ語系の諸言語において、「毒」という観念それ自体に両義的な性質が認められるという点である。たとえば、ギリシア語の *pharmakon* は、「秘蹟」、「治療」、「毒薬」、「護符」などを意味し、毒／薬という両義的な存在を指し示すとともに、超自然的存在とのつながりさえ喚起する語であった (モース 2014: 47, cf. 今村 1992; デリダ 2013)。M. モースは、ゲルマン語系の諸言語において、贈り物 (*gift*) という語が「贈り物」と「毒」という二つの意味を分岐してもつようになった点を指摘した上で、この語の両義的な性格が、命を吹き込まれた贈り物の「活性」や、それがつくり出す「双方向的なつながり」の危うさに由来すると論じた (モース 2014: 37, 99-100, 369)。

ところが、近年の「毒」をめぐる議論、さらにはリスク論的な見方においては、「毒」を単なる有害物質とする見方が蔓延しているように見受けられる (cf. ラトゥール 2008)。こうした見方において、「毒」は削減・除去すべきもの、あるいは忌避すべきものと考えられる傾向にある。たしかに、この傾向は、曖昧なものや異例なるものの排除をめぐる象徴体系の存在とも深くかかわっている (ダグラス 2009: 37-38)。また、先述したように、19 世紀以降の有機合成化学の発展が従来存在しなかった多種類の「毒」をつくりだし、地球環境全体への大きな脅威をもたらしたことも厳然たる事実である。

しかしその一方で、現代世界において、「毒」はあまりにも多様化している上、社会的状況に応じて絶えず変貌するために、「毒」を絶やそうという試みは「箆で水を掬う」ことにもなりかねない (マレッシ 1996: 453)。さらに、「毒」をめぐる出来事を単純な物質的問題に還元することで、その出来事が示唆する社会的・倫理的側面から注意をそらす、という事態も起こり得る (cf. ダグラス 2009: 315)。たとえば、「環境汚染を防ぐには汚染物質を除去すべきである」という前提に立った環境運動や政策は、汚染の原因物質のみを悪とするような言説を生み出すことがある (cf. 嘉田 2005: 271-273)。したがって、「毒」が遍在する現代世界にあってこそ、「毒＝有害物質」という還元主義的な見方からは零れ落ちる「毒」

のありようを描き出していくことが重要な意義をもつ。それは、身のまわりのさまざまな「毒」との付き合い方を、新たな視点から見つめ直す機会を提供することにもつながるはずである。

4. シンポジウムの構成

以上をふまえ、本シンポジウムは、3部構成で行なった。セッションⅠ「あわい（間）を生きる「毒」」では、フィールドワークの時間という比較的短期のタイムスケールのなかで、毒／薬、贈り手／受け手、生／死、可知／不可知、人／動植物といった二項の境界を生きる「毒」のバイオグラフィーに光が当てられた。セッションⅡ「「毒」の新たな相貌」の各発表は、文献資料もふまえながら、より長期のタイムスケールのなかで、現代世界における「毒」のバイオグラフィーを捉えようと試みた。ここでは、ときに権力とも結びつきながら、私たちの日常生活のなかに密かに侵入する「毒」に光が当てられた。セッションⅢ「「毒」をめぐる学際的な知の交差」では、まず、コメンテーター2名が文化人類学と歴史生態学・考古学の観点からそれぞれ個別発表の成果を交差させ、議論のための素材を抽出した。最後に、フロアも含めた総合討論のなかで、「毒」をキーワードにしたフィールドワーク手法等について議論した。

なお、以下のセッションⅠ・Ⅱの発表要旨（p. 5-10）は、各発表者の文責において執筆されたものであり、セッションⅢのコメント（p. 11-14）及び総合討論（p. 15-24）は、編者の文責においてとりまとめた内容を、発言者それぞれにご確認頂いた上で掲載した。ただし、ご所属・氏名を確認できなかったフロアからの発言者が1名いたことをお断りしておく。

参考文献

- Appadurai, A. 1986 Introduction: Commodities and the Politics of Value, In A. Appadurai, ed., *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 3-63.
- ダグラス, M. 2009 『汚穢と禁忌』（塚本利明訳）筑摩書房.
- デリダ, J. 2013 『散種』（藤本一勇ほか訳）法政大学出版局.
- 今村仁司 1992 『排除の構造——力の一般経済序説』筑摩書房.
- 嘉田由紀子 2005 「制御か共感か？——住民による環境調査に見る幸せの形」『先端社会研究』2: 269-302.
- Kopytoff, I. 1986 The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process, In A. Appadurai, ed., *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 64-91.
- ラトゥール, B. 2008 『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』（川村久美子訳）新評論.
- マレッシ, J. 1996 『毒の歴史——人類の営みの裏の軌跡』（橋本到・片桐祐訳）新評論.
- モース, M. 2014 『贈与論 他二篇』（森山工訳）岩波書店.

●長岡 慶（京都大学／文化人類学）

「ヒマーラヤ地域における毒／薬 —インド北東部タウンの毒盛りとトリカブトをめぐる実践」

Kei NAGAOKA, Kyoto University

Poison/Medicine in the Himalayas: Practices surrounding Poisoning and Aconite

本発表では、インド北東部のタウン社会における毒盛りをめぐる言説とトリカブトを用いた民間薬の精製・利用に焦点を当て、目に見えない曖昧な「毒」が、どのような過程や条件のもとで現実のものとして経験されるのかを論じた。

チベットやヒマーラヤ地域では、毒を盛られることによって生じるとされる病いや死が広く語られており、様々な研究者が毒盛りに関する言説を報告してきた。チベット-インド間のトランスヒマーラヤ交易において歴史的に主要な中継地であったタウン社会では、広域的な移動がおこなわれてきたことを背景に、見知らぬ他者との接触がもたらす危険の一つとして毒盛りが語られてきた。現地調査から、目に見えない毒は、ケガレや呪術と異なるものとして区別されていながらも、人びとの社会関係を変える重要な要素の一つとなっていることが明らかとなった。特に、ドーマ（毒盛り女）によって引き起こされる病いは、病院の薬では治すことができず、民間薬や儀礼によって解毒をしなければ死に至るとされている。タウンの一部の村にはドーマとされる人たちが暮らし、周囲に住む村人にとって歓待してはならない存在とされ、儀礼および集会への参加や他人の家への出入りが制限されている。ドーマは母から同居する娘や嫁へ代々、毒盛りを継承していくといわれており、村人のあいだで恐れられている。しかし、毒盛りによって病いが生じたとされる時、不可視である毒の介在を証明することは実際には困難であるため、毒を盛った犯人が解明されることはなく、ドーマは誰なのかということについて様々な憶測が交錯するなかでドーマを疑う側と疑わない側の分化が起こり、毒盛りによる病いが起こるたびに村の人間関係に様々な変化が生じている。さらに、ドーマの疑いが新たにかけられた人びとに対して、歓待の禁止等のルールは適用されないため、ドーマと疑われながらも当人は村で普通に生活し、関わりをもった周りの人たちや家族もさらにドーマの疑いがかけられ、その結果、ドーマ（を疑われる人間）が村でどんどん増殖していくという状況がある。

毒と身体との関わりに関して、毒の病いはドーマと飲食を共にすることで生じるが、発病するか否かは毒を盛られた人物の功德の多寡によっても決まるといわれている。不可視の毒は、身体に表出する症状をもって実体化するわけではなく、トリカブトを主原料とする民間薬の作用を通して初めて実体化する。もし身体にドーマの毒があった場合、民間薬を服用すると強烈な嘔吐や下痢が生じるが、そうでない場合には何も起こらないとされ、病者は民間薬の効果の発現の仕方を解釈することを通じて、ドーマの毒を現実のものとして身体的に経験していく。

以上の点から、毒は、その曖昧さゆえに社会関係に多様な変化をもたらす媒介項となり、「毒を盛る／毒で病む」人びとの現実、身体の不調それ自体だけでなく、地域の歴史や社会関係、毒や薬をめぐる村人の実践や薬の作用が絡まりあうなかで生じていくと結論づけた。

●大石 高典（東京外国語大学／歴史生態学）

「カメルーン東南部熱帯雨林における魚毒漁 — 「毒が効かない」ということの解釈をめぐる」

Takanori OISHI, Tokyo University of Foreign Studies

Fish Poisoning in Tropical Rainforest of Southeastern Cameroon: How Local People Interpret Malfunction of Poisoning

本発表では、カメルーン東南部の熱帯雨林において漁撈農耕民バクウェレの人びとが集団で行なう魚毒漁に着目し、在来の野生植物から有毒物質を採取・加工し、川の地形を読んで魚毒を投入し、魚を捕獲し、その成否を解釈するという人びとの一連の身体的営為のなかで、「毒」がどのように感覚・触知され、文脈に応じて新たな解釈を生んでいくかを検討した。

冒頭でバクウェレと魚の関係について紹介した。バクウェレの人びとのあいだに人と魚を魂の有無や主体性の有無で弁別するような観念は認められない。魚の民俗分類の分析からは、彼らが魚の生態に精通しきわめてプラグマティックな知識をもっている一方で、人に病気をもたらすと同時に薬でもある存在として魚が感覚・触知されていることが明らかとなった。このことから、日常的に親密な接触をくり返すなかで、魚の色や形、手触りといった特徴が、「食」や場合によっては「接触」という営みを通じて人間にも移ると感じとられていること、言い換えれば、人と魚の身体を相同性の感覚によって捉えるナチュラルスティックな疾病観の存在を見出すことができる。

乾季にジャー川下流域で行なわれるモンゴンボ (*Milletia sanagana*; マメ科) やアサマ (*Turraeanthus africanus*; センダン科) といった在来の野生植物を用いた魚毒漁の実践は、植物や川の状態など複合的な要因によって左右されるため、その成否がきわめて不安定であるという特徴を持つ。そのため、樹皮の採取・加工、漁の実施といった各段階にわたって、魚毒を失活させないためのさまざまな禁忌や儀礼的实践が存在する。たとえば、高木となるアサマを用いた漁では、成木の周りにやぐらを組んだ上で山刀を用いて樹皮および形成層の部分を削り取る。十分な漁の魚毒が確保できたら、川に降りて魚毒を水に漬けるが、漁の全体を仕切る男性の指示があるまで、それ以外の者は水に入ってはならないとされる。発表者が参加したいくつかの魚毒漁のなかでは、「毒が効かない」という事態、すなわち漁の失敗が起こると、それは参加者の病いや死といった不幸な出来事の予兆として解釈されていた。さらに、魚毒漁の失敗が参加者の親族の実際の死に結びついた事例さえ存在し、そこでは参加者の子どもの不可解な死を契機に「毒」が現実化したと捉えられていた。

以上を踏まえ、①魚毒漁では特定の対象魚種や個体でなく環境（水域や森）への働きかけを媒介にして不特定多数の魚を捕らえようと試みるため、行為の不可知性が増大すること、②バクウェレの人びとは「毒が効かない」という事態を社会関係の変化の予兆として捉えることがある、③妖術をめぐる在来の観念や、先述したナチュラルスティックな疾病観を踏まえて、「人が魚に妖術をかける」だけではなく「魚が人に妖術返しをする」といったような象徴的な相互作用のあり方が措定されている可能性を指摘した。

●吉田 真理子（オーストラリア国立大学／文化人類学）

「牡蠣と人の関わりをめぐる〈毒〉の比較、知識実践」

Mariko YOSHIDA, The Australian National University

Becoming Poisonous: Knowledge Practices of Comparison in the
Oyster-Human Entanglement

本発表では、食用種として流通しているマガキ属（Crassostrea）の牡蠣を対象に、不測の事態、偶発的事態としての〈毒〉によって再編成される牡蠣と人の関わり合いを検討した。Multispecies ethnography の諸成果が示すように、異種の境界はパースペクティブや尺度によって流動化する。本研究では、人の腸内に寄生するノロウイルスの増殖と、牡蠣の生存を脅かす海洋の酸性化というふたつの異なる〈毒〉のあらわれを分析対象とし、宮城の牡蠣養殖漁師、東京の仲卸・飲食業者、海洋生物生理学者と牡蠣のあいだの関係性が紡がれていくプロセスを、知識生成に焦点を当て明らかにしようと試みた。

第一に、牡蠣の幼生にとって〈毒〉となり生存を脅かす海洋の酸性化をめぐる、種牡蠣養殖漁師、海洋生物・生理学者の解釈を分析した。まず、宮城県東松島市の種牡蠣養殖漁師の日々の実践からは、彼らが藻類やしゅうり貝（ムール貝）などの牡蠣への付着物の変化を敏感に察知し、震災後の潮通しの変化、海水温、風向、台風等によってその都度形作られる「潮時仕事」によって種牡蠣の斃死を捉えていることがみてとれた。また、牡蠣の幼生に対する海洋酸性化の影響評価実験を行なう海洋生物生態学者が、地域や周辺生物種、時間帯による pH 値の不安定性を指摘していたのに対し、水圏動物を研究する生理学者は長期時間スケールにおける pH 値の安定性を強調しつつ、海洋酸性化と牡蠣の大量斃死を関連づける生態学の再現性に疑義を抱いていた。この事例は、諸々のアクターが紡ぐネットワークが安定性や持続性を獲得してだけでなく、参与するアクターが実験系によっても変わってくるような関係性の揺らぎ、及び人新世（Anthropocene）における不確実な知識生成のありようを示している。

第二に、人にとっての〈毒〉であり、人間の腸内のみで寄生、増殖するノロウイルスと牡蠣のつながりを分析した。紫外線を用いた牡蠣の殺菌浄化法は 1955 年に開発されていたが、1972 年に「ノロウイルス」という〈毒〉の形態が明らかになり、それが牡蠣と地続きの存在として語られるようになったことを受け、遺伝子レベルでの検査方法が開発されるに至った。ヒトが免疫をもたないウイルスとして変異が続く中、世界初のウイルスフリーの牡蠣養殖、および牡蠣のブランド化を志向する生産者や、ノロウイルスの流入を懸念して牡蠣の流通経路の見直しに向かう仲卸・飲食業者が現れており、両者の関係性が再編成されていることがうかがえた。ここから、「毒」を介した関わり合いが新たな技術革新を生み出すと同時に、そのことによって社会関係もその都度立ち現れるというつながりのありようを指摘した。

最後に、今後の課題として、異なる〈毒〉によって状況づけられた日常実践のなかに、生の危うさ、不確実性をめぐる関係性の現われをどのように記述していくか、という問題提起を行なった。

● 関山 牧子 (東京大学／人類生態学)

「インドネシア西ジャワ農村における化学物質導入と住民の認識」

Makiko SEKIYAMA, The University of Tokyo

Introduction of New Chemicals and Residents Perception in Rural West
Jawa, Indonesia

本発表では、インドネシア西ジャワ州のチタルム川流域において、国家主導の急速な近代化や市場経済化の波にさらされてきた村落社会への化学物質の導入過程を検討した。同地域では、高まる人口圧に対応するために、自家消費型の農業生産から換金作物栽培へと生業が変容し、生産性向上を目的として多様な化学物質が投入されるようになった。これらの変化は、他地域との物質的・人的交流を活発化した一方で、村落社会における環境劣化や健康への影響への懸念を顕在化させることにもつながった。特に農薬や重金属による水系への複合的な水質汚染が重要な懸念事項となってきたのである。

そこで、第一に、チタルム川上流の2村に住む73名の農民への質問紙調査を通じて、インドネシア農村部住民の農薬使用状況を明らかにするとともに、農薬使用と農薬曝露による自覚症状との関連を検討した。その結果、25種類程度の農薬が使用されており、それらを化学構造別に分類するとジチオカーバメート系、ピレスロイド系、有機リン系の順で多いことが分かった。またWHOの毒性区分(International program of chemical safety, 2001)に従えば、使用されている農薬のうち約4割が中程度以上の毒性をもち、住民からも自覚症状が訴えられるにもかかわらず、農薬の準備・散布にあたり、マスクや防御メガネなどの使用はほぼ認められないということを指摘できた。

第二に、農薬への感受性や、遊びなどの行動を通じて身近な環境から曝露されるリスクが高い同地域の子どもの農薬曝露状況を定量的に把握するために、チタルム川流域において生業形態を異にする3農村の小児198名を対象として、有機リン系農薬の尿中の代謝物を分析した。その結果、有機リン系農薬代謝物の検出率はさほど高くなく、むしろ日本の子どもの方が高いことを見いだした。この結果は、有機リン系農薬の曝露が、居住環境における農業活動のみならず、その他の曝露源にも由来していることを示している。さらに、同地域の成人も含めた上で、尿サンプルを用いて農薬・重金属への曝露状況を分析したところ、有機リン系農薬の代謝物は成人の40%、子どもの30%以上から検出されたものの、日本人に比べ曝露状況が低いこと、及び農薬への曝露が食品中残留農薬に由来する可能性が高いことが分かった。一方、重金属への曝露には集落差が存在したが、健康影響が懸念されるようなレベルの汚染ではないこともみてとれた。

以上を踏まえ、汚染された村落景観が喚起する「毒々しさ」や住民の自覚症状とは裏腹に、数値としては顕在化しない「毒」のありようを指摘した。その上で、多様な化学物質が流動性を増しているグローバル化の時代において、全ての物質の総合的なリスク評価が困難である一方、モニタリング等を通じた顕在化しない「毒」へのアプローチも重要であると論じた。

●下田 健太郎（日本学術振興会・お茶の水女子大学／歴史人類学）

「毒」を消化／昇華する 一水俣病と共に生きる人びとのライフヒストリーを通して」

Kentaro SHIMODA, Japanese Society for the Promotion of Science,
Ochanomizu University

Digesting and Sublimating “Poison”: Life Histories of People Living with
Minamata Disease in Japan

本発表では、水俣病と共に生きる人びとのライフヒストリーのなかに、「毒」が変成・転換してゆくプロセスを探ることを目的として、「水俣病」の位置づけをめぐる一連の社会的状況の推移のなかで彼らが水俣病と共に在る自らの身体とどのように向き合い、新たに経験し直してきたかを検討した。1956年に公式に確認された水俣病は、チッソ株式会社の工場排水中に含まれていたメチル水銀によって、九州南西部の不知火海沿岸一帯に広がった中枢神経系の疾患を指す。それは汚染された魚介類を食した人びとに甚大な身体的・社会的被害をもたらしたのである。水俣病はその後、行政機関によって認定された者だけが「患者」とされ、補償金が支払われるという仕組みのなかに置かれることとなった。本発表でとりあげたO氏とM氏は、こうした「認定＝補償＝救済」という自明性のもとで居場所を見つけられず、支配的な言説からは零れ落ちる自己の身体を独自の仕方でも確認する試みを続けてきた人物である。

O氏は身体的不調を抱えつつも、幼い頃に劇症型水俣病で亡くした「父親の敵討ち」を強く求め、1985年に水俣病の認定を求める運動から離脱した。フィールドワークを通じて、運動を離脱して以降のO氏が、漁師としての日々の実践やかつての漁村の記憶を手がかりに、「生かされている」という関係のなかに自らの身体を位置づけ、自然界の一員として「共に毒を引き受けた」存在である全ての生きものに祈りを捧げてきたことを看取できた。同時に、O氏が自らのなかにも「内なるチッソ」を見いだしてきたこと、すなわち、誰もが加害性と被害性を持ち合わせざるを得ない現代社会において、人間の罪や業との対話を継続するという、内なる他者への絶え間ない配慮の重要性を見いだしてきたことを指摘した。

M氏は、自身の身体的不調が水銀に由来すると青年期には気づいていながらも、差別を恐れ、約40年間近く沈黙を続けてきた人物である。特徴的だったのは、同氏が96年以降に開始した「認定」を求める闘いの過程で、身体的不調ではなく「存在」の認定を求め始めたことである。その背景としては、水銀や汚染魚を埋め立てた水俣湾埋立地の「実生の森」において、M氏が「水銀を吸って育った」木々と対話を重ね、水俣病による被害に遭った生きものの「命の想い」を感じるとという新たな身体感覚を得てきたことを指摘できた。こうしてM氏は、実生の森の木々から「こけしの精霊」を生み出し、有縁の人びとに手渡すという実践を展開してきた。

彼らの実践に共通するのは、元来の「自然な」身体を要求するのではなく、「毒」を引き受けた身体を新たな「自然」として生き直す試みであった。以上を踏まえ、「毒」という統御不能な他者を対話の相手として独自に「消化」し、さらには、倫理的な指針を得るための糧として「昇華」していくという生存の技法を指摘した。

●上杉 健志 (岡山大学/文化人類学)

「枯葉剤は毒ではない? —ブルックリンとアルーイでの毒概念のギャップと汚染」

Takeshi UESUGI, Okayama University

Agent Orange is Not a Poison?: Differences and Contaminations of the Concept of Poison

「枯葉剤は毒ではない。」2005年、ベトナム枯葉剤被害賠償裁判を棄却した米国連邦裁判所判事ジャック・ウェインスタインがこう結論付けた際、多くのベトナム国内外の有識者は、この発言に憤りを示した。明白かのように思える枯葉剤による中毒被害に対する否定ととらえられたからである。しかしベトナム戦争中多くの枯葉剤が散布されたベトナム中部のアルーイ盆地では、枯葉剤による被害は外部の人たちが思うほど、必ずしも自明ではなかった。年配者の多くは、過去を振り返り戦後数十年間にわたって「枯葉剤の被害について知らなかった」と証言したのである。この認識の差はどこから来るのか。本発表では、枯葉剤のバイオグラフィーと毒のバイオグラフィー（「毒」の概念の変容）の関係をそれぞれに精査し、両者の関係を明らかにする。

19世紀に発明されたヒ素系の農薬は、その使用が重なれば土地の生産性も下げるという明らかな「毒」であった。これに対し、枯葉剤を構成する2,4,5-Tは、「擬似植物ホルモン」というカテゴリーの化学物質に属する除草剤として、第二次大戦直後に市場に現れた。1946年の『サイエンス』の社説には、それを「毒」ではなく「成長制御」の原則に基づいた物質とする記載が認められる。この背景として、1950年代末までの公衆衛生や薬物の安全性試験において、少量の服毒の長期的影響や世代を超えた影響という2つの毒性は視野に入っていなかったことを指摘した。その後、1957~61年に起こったサリドマイド事件を契機に、妊婦の胎盤を通じた胎児への化学物質の汚染に注目が集まり、「催奇性学」という学問や安全性試験の方法の再編が進められてきた。さらに1962年のレイチェル・カーソンによる『沈黙の春』の出版や、1960年代末に枯葉剤の中毒被害の問題がクローズアップされたことを受け、発がん性、突然変異原性、催奇性という3種類の新たな毒性が見いだされてきたのである。

本発表では、これらの新たな毒性を、「統計学的毒性」と「超世代的毒性」として特徴づけた。つまり、「毒」の服毒量や閾値、急性毒性ではなく、少量の服毒の長期的影響や慢性症状が問題になるのだとすれば、大量のサンプルを集めた上で複数集団の比較を通して臨床では明らかにできなかった発癌リスク等を統計学的に示すことが必要になる。そしてその際の対象はもはや個人ではなく、populationであり、世代を超えた影響を捉えるためにはロングタームのモニタリングが求められる。まさにこのコンテキストのなかで「毒性」のスコープが広がり、1969年に初めて枯葉剤の毒性が確認され得たのである。

● 棚橋 訓 (お茶の水女子大学／文化人類学)

コメント①

Satoshi TANAHASHI, Ochanomizu University

Comments

薬学的・化学的には「薬」という物質も「毒」という物質も存在しない。そこで、本シンポジウムでは、あるモノが「毒」になるプロセス、あるいは「薬」になる可能性のあるプロセスに着目していた。そのことを通じて、たしかに「生物活性物質」というカテゴリーは存在するものの、その働き方によって物質が見せる顔というのは非常に多様であるということが示された。文化人類学の立場から言うと、そこから改めて人間のスタンスに立ったときに、生物活性物質が我々のなかに何を活性化するか、あるいは何を不活性化してしまうのかということが一つ重要な切り口になると考えられる。その意味で言えば、第I部のご発表は、何を活性化するか、第II部のご発表は、何を不活性化してしまうのか、さらに適正なバランスを失ってしまったときに何かを崩してしまう、その力の介入とはどういうものなのかということを知てくれた。加えて問題が生じたときに、回復することができない改変を与えてしまう、人為的な力の介入の強さを感じた。

長岡さんのご発表のなかにあった「毒」は、社会のつながりを活性化する物質、特に社会関係を活性化するものとして理解することができる。自分に「毒」を盛られたのかどうか、その意味内容は捉えられなくとも、現象を捉えられるようにする。つまり、人を社会のなかにつなぎとめる作用、それが「毒」が盛られる可能性のなかにあるのではないか。

大石さんのご発表では、「毒」を通した人と魚の相互作用が示された。「毒」としての魚／「薬」としての魚ということは、そもそも魚と人のつながりのあり方が、社会のあり方を活性化していく可能性を秘めている、場合によっては、魚と人の関係のあり方が社会を失活させてしまう可能性すら持っているということでもある。

吉田さんのご発表に関して、人は様々なものを馴化して、(半)栽培し、人間を主体や中心に据えて関係性をもってきた側面が多いかもしれない。同時に、そもそも食べ物というものを考えたときには、フグ、キャッサバ、ジャガイモ、カツオ、牛レバーがそうであるように、そこには極めてリスクな側面が含まれるのではないだろうか。しかし吉田さんのご発表のなかで強く感じたのは、牡蠣という存在を通じて、部分的にしか関与しなかったかもしれないもののあいだに、関与と絡み合いの関係を改めて活性化してしまった「毒」—CO₂—の存在である。そして、そこには不安定なつながりが立ち現れている。もしかしたら、非安定的で、御し得ない非システムをつくりあげてしまったような、それを活性化してしまったようなCO₂の存在ということも言えるのかもしれない。それは吉田さんの言葉を借りればリスク、すなわち不確実性の問題である。つまり不確実性に満ちた、今あるものを活性化してしまったCO₂という「毒」の存在ということを学ばせて頂いた。

関山さんのご発表に関して、日本語では「農薬」と言っても「薬」という字を使うが、英語

にすると“pesticide”で、殺すための道具という意味合いが“cide”という綴りに明瞭に表れる。つまり、何かを殺すための道具として特化した生物活性物質が、引き続き起こるハザードをも活性化する存在だったのだということを改めて感じた。同時に、食品生産のグローバル化のプロセスのなかで、そのハザードもグローバル化していく。その「毒」は、複合化という側面において、顕在化しにくく見えないものになっていってしまった。おそらく同じ側面を、吉田さんは「潜在性」という言葉でお示しになったのではないか。

下田さんのご発表に関して、日常食である魚に埋め込まれた「毒」、しかも恵比寿さんからの贈り物である「のさり」のなかに仕込まれてしまった「毒」の存在によって、信頼していたものからの裏切りを経験するプロセスがあったのではないか。そのことは、0さんのなかにも、自分が加害者であるかもしれないという自責の念として現れていた。しかし0さんは同時に、自分の身体のなかの神経系の末端にすら共存してしまっている水銀毒の存在をしかと見極めていた。そして、体外から取り込むのではなく、もう切り離すことができない「毒」、自分の身体のなかに共存してしまっている「毒」の存在というものにしかと目を向けていた。その結果、「毒」を引き受けた自らの身体という考え方も、0さんはお持ちになったのではないか。発表のなかで強く感じたのは、地域社会の生のあり方を破壊し、断絶し、さらには停止させてしまうような、社会そのものを失活させる「毒」のありかたである。しかしそのことは、「現実とどのように向き合うのか」、「いかに人としての自分の生を取り戻すのか」という2つの問いをたとえば0さん自身のなかに、極めて強く活性化したのではないか。それは極めて悲しい方法だけれども、0さんにとっては「希望という方法」にもなっているのだということを感じた。

上杉さんのご発表になったポイントは、新しい「毒」の誕生のプロセスだと考えられる。それは1960年代後半に至るまで不可知であった「毒」からいかに曝露されているのかという問題でもある。そこには、共通の経験としての枯葉剤への曝露が構築されていくプロセスも含まれていたのではないか。しかも、生命過程の不活性化物質、つまり成長抑制という新しいタイプの、マイナスの活性化をはかる「毒」の存在ということで、従来の「毒」の存在との違いを強く感じた。しかしその過程は、「毒」とはどのようなものなのかということに対しての新たな問いを生むことにもつながった。私が興味深く感じたのは、「毒」という存在の定義が、統計学的毒性をいかに捉えるかということに変わっていった点である。その重要なポイントは、比較という作業が「毒」を認定していくという営みに入ったことである。より具体的に言えば、epidemiology、すなわち疫学的な方法がそこに入っていった。その方法が共通の経験を生み出す一端にもなっていたというアイロニーが描き出されていた。

以上を踏まえ、私のなかでは「毒」の人類史への切り口としての重要性を感じた。化学的には生物活性物質として捉えられているものが、「毒」にもなり「薬」にもなっていくというプロセス、それを改めて、人間において何を活性化し、何を不活性化してしまったのかと問いかけていくことで、一つの糸をつないでいくことができるのではないだろうか。

●山口 徹 (慶應義塾大学／歴史生態学・考古学)

コメント②

Toru YAMAGUCHI, Keio University

Comments

コメンテーターとして参加してほしいと依頼された際、東ポリネシアの環礁、トンガレヴァ島の祭祀遺跡(マラエ)から出土したウミガメを思い出した。儀礼的に調理された痕跡だった。オセアニアではウミガメは強いマナ(*mana*)を持つ、あるいは強いマナを運ぶ動物と信じられてきた。マナは、聖なる力あるいは霊的力。権威の源であるとともに、人から人に、動物から人に、人からモノに動くエネルギーのようなもので、強いマナの移動には危険が伴う。それだけに、強いマナをもつウミガメを食べるには儀礼的処理が必要と考えられていたのだろう。しかし、全ての存在はタオンガ(*taonga*)、すなわち生まれ持ったマナの容器を持ち、その器の大きさ以上のマナが流れ込むと生命の危険に晒される。それゆえに、儀礼的に処理されたとしても、食べられる人／食べられない人、たとえば男性／女性・子供、高地位者／一般島民といった社会的差異化がウミガメの饗食に際してたち現われてくる。

ところで、ウミガメは海藻を食べることによってチェロニトキシン(chelonitoxin)という毒素を体内に蓄積すると言われている。東南アジアやオセアニアではウミガメは共食されることが多いから、「当たって」しまった場合は多くの人びとが同時に食中毒をおこす。しかし、症状には強弱があるし、食べる部位によっては症状がでないこともある。その差がマナという概念と結びついたのだとしたら、このシンポジウムで「毒」と呼ぶ物質を社会の差異化と結び付けて考えることができそうだ。

社会を差異化する「毒」という視点でこのシンポジウムに臨んでいたら、多くのご発表者が社会関係と「毒」のことについて話していた。たとえば長岡さんのご発表のなかに、「毒」にさらされたと疑われるときに、徳のある人は大丈夫で、徳を積んでいない人には症状が出たというお話があった。とすれば、症状の現われ方の差というものが徳の多寡による社会関係を生みだしているのかもしれない。大石さんのご発表からは、民俗植物学的な知識は一定不変ではないだろうから、知識を持つ者と持たぬ者の差が、さらには知識そのものの通時的な変化が、人と人、人と魚の関係にどのように作用するだろうということを考えた。それから上杉さんが話された「なぜ枯葉剤が集団意識あるいは集団の記憶にならなかったのか」という問題に関しては、社会的差異化の原因となりうる症状自体が個々に隠蔽されてきたからと考えられないだろうか。

さて、第二のキーワードとしてアンソロポシーン(Anthropocene)を挙げたい。これは、日本語で「人新世」と訳される地質学的な時代区分の一つであり、近年、一番新しい時代として提唱された概念である。人やモノの移動が激しくなることで急速に物質や情報が拡散し、同じような現象が多くの地域で同時的に生じうる時代に私たちは生きている。氷期／間氷期のサイクルやプレートテクトニクスといった全球的な環境変動のかわりに、人間由来の

物質や情報がグローバルに引き起こす現象をアンソロポシーンの要件とすれば、「毒」という問題も同様の枠組みのなかで考えてみる必要があるのではないだろうか。

たとえば、吉田さんが言及したラトゥールのアクター・ネットワーク理論に対し、インゴルドが「リゾーム」という言葉を使っている。土壌の状況によってどちらに伸びるか分からない地下茎のように、不安定で不測的なネットワークのありようを示す。この言葉から想起されるのは、グローバルにモノが動くことによって、サイエンスの専門家ではない市井の人びとが何と何を結びつけるだろうかという問題である。そこでは、非常に複層的で、不可視で、突発的で、そしてすぐに壊れていくような繋げ方が日々生み出されていないだろうか。たとえば漁師や仲卸の方々、地球温暖化の問題と最近特定されたノロウイルス、その対処法を、科学的根拠がなくとも感覚的に結びつけるという状況は、実はアンソロポシーンの時代なかでリゾーム的に成長するネットワークなのではないかと考えた。

関山さんの自然科学的な調査のお話しのなかにも、周辺の農村からさまざまな農薬や化学肥料が流れ込む人造ダム湖が紹介されていた。そのダムからのびる水系によって撒き散らされる広範囲にわたる被害というものを理解する上で、このリゾームという考え方ももしかしたら役に立つのではないかと考えた。ダムの上流側に目を向ければ、常に一定の農薬や肥料が使われているのではなく、世界のさまざまな場所で生産された農薬や肥料がときどきの経済状況や流通経路に応じて偶発的に使用されている可能性があるのなら、その不安定性をリゾーム的ネットワークとして捉えることができないだろうか。そうすれば、上流と下流の2つのネットワークを繋ぎとめるノードとしてダムを位置づけることができるかもしれない。

「毒」が生み出す社会関係、アンソロポシーン、そして最後に思いついたキーワードは、梅棹忠夫氏の『日本探検』に由来する。特に「名神高速道路」という章では、高度成長期の高速道路建設にともなって生じた対立論理として、「開発の論理」と「存在の論理」が取り上げられ、両者のせめぎ合いが焦点化されている。開発の論理とは、便利になる（であろう）未来によって開発が正当化される論理である。それに対して、存在の論理とは、開発によってつぶされていく様々なモノ・コトたちの保存を過去との繋がりによって正当化する論理である。

下田さんのお話を聴いて考えたのは、「毒」というものが、2つの論理のせめぎ合いを可視化するというか、あるいは強化する、そういう存在なのかもしれないということである。水俣病問題はまさに存在の論理が開発の論理に牙をむく、そういう場であり、せめぎ合いの場を生み出した媒介項として有機水銀を位置づけることができるのではないか。すると、ある物質が「毒」と認識されていく経時的プロセス、すなわち過去から現在、未来へと動いていく直線的時間性に加え、「対立する過去と未来」とでも呼ぶべきもう1つの時間性が存在するのではないか。そういう場面を生み出す作用を「毒」が持っているとしたら、未来と過去の対立を「解毒」するために何があるのか。下田さんが紹介した「実生の森」の話はまさに、「解毒」に向かおうともがく当事者の方々の具体的な試みとして私の目には映った。

●総合討論

Open Discussion

1. 発表者によるコメントへの応答

大石：民俗植物学的な知識というものが静的にずっと同じであるわけではないという山口先生からのご指摘は、その通りだと思う。バクウエレの人びとのなかでも民俗知識にはバラつきがあり、生態の変化によっても知識は変わってくると考えられるが、今回の分析ではそれらの点は詰められなかった。人と魚のインタラクションだけではなく、実際にはそこに植物学的な知識も関わっており、さらに植生と人間のあいだでもインタラクションがあつて、まさにそこが歴史生態学の扱うところだと思う。人間が景観にインパクトを与え、その景観の変化が知識の動態に変化を与えるだけでなく、そこには魚などの水系の話も関わってくる。人と魚という風に関係性を切り取ってしまうのではなくて、景観も含めたダイナミクスのなかで「毒」が効くこと／効かないことをどう捉えればよいのかということに注目しながら、(発表の成果)をペーパーにしていければと考えている。

上杉：コメントのなかで、「毒」というものが過去と未来を対立させるような時間性を生むという部分が興味深かった。「毒」というのは記憶、過去との密接なつながりがある。ここで言う「未来」とは、開発という未来なのかもしれないが、たとえば補償や新しいコミュニティというかたちで、その過去を再度つくり直していく。「毒」はそのような時間軸をも表すのではないだろうか。そして社会の差異化もそうだが、社会の差異化と収集(assemble)、今まで全然つながりが無かった人たちがつながり、今まで一つのコミュニティだったところが分裂し、という両側面があるのだと考えた。

吉田：Anthropocene の時代においては、それぞれの方が結節点をすぐに見つけ、そして見つけたと思ったら分散していくというような、それが非常に Anthropocene 的ではないかという山口先生のご指摘が興味深かった。それを受けて解毒、どういう状態が解毒なのかということを考えた。色んなつながりや関わり合い、もつれ合いがどんどん拡張していつて、至る所で生まれていつて、おそらく際限なく広がっていく。そのときに、一回解毒された状況というのは、そのネットワークが切断される、停止される状態なのではないか。そのような視点で解毒というものを考えてみてもよいのではないだろうか。

関山：山口先生から、「毒」を Anthropocene のなかで考えていくこと、ダムが撒き散らしたであろう被害をリゾームという視点でみていくことをご提案頂いたが、まさにその通りだと思う。ダム湖で養殖されている魚が都市部のジャカルタや富裕層に売られていくという現状があり、そういう方々が被害を受ける可能性もある。そして、これは棚橋先生からご指摘頂いたことにも通じるが、「食」のグローバル化のなかで、「毒」がどう散らばっ

ているかというのは本当に分からない。我々日本人も、実は「毒」を持っているものを知らないうちに食べている可能性もあると思うので、そのような文脈で捉えていくことは大事だと考えた。

下田：棚橋先生からは、「毒」が人間において何をどのように活性化させ、どのように失活させるのかという点に着目することの重要性をご指摘頂いた。加えて、棚橋先生のコメントの中には、社会を不活性化させながら、別の次元でみたときに活性化されてくるものがあるという指摘も含まれていた。たとえば0さんに2つの問いを生んだように、不活性化の動きと同時に活性化の動きも起きているという、その矛盾した動きのモメントのようなものをどのように捉えていくことができるのかというご指摘がとても興味深かった。それはおそらく、未来と過去が対立するような現場を「毒」が可視化する、あるいは生み出すという山口先生のご指摘ともつながってくる。そこから、「毒」というものは、線形的な時間だけではなく、たとえば人びとに「遡る」という意識を生みだしたり、あるいは未来から過去を見るというような意識さえ生み出すことがあり得るのだということを考えた。水俣の事例で言えば、たとえば死んだときから「今」を見直して、水俣病によってマイナス100になってしまった人生が、死ぬときには、マイナス1ぐらいになってほしいというような、未来から過去を見るような視点さえ存在する。その複雑な時間性みたいなものを、ただ線形的な時間だけで捉えるのではなくて、矛盾したモメントをどう記述できるのかという宿題を頂いたという風に感じた。

長岡：タウン社会では、身体の中に入る何かという感覚や、それがどんどん遺伝で継承されていくという感覚を現地の方々が強く持っている。「毒」は身体の中に入る何かであるということがとても重要だと思う。身体の変化と社会の変化が、どのように密接に絡まるのかということはずっと考えていたので、「毒」が社会の差異化と結びつくというコメントが興味深かった。社会が差異化されることによって、今度は逆に「毒」がどんな意味をもつものとなっていくのかということを考えて。活性化と不活性化が同時に起こるといのはとても興味深い視点なので、私もこれからきちんと考えていきたいと思う。

2. フロアからの質問・コメント

○熊田 陽子氏（日本学術振興会・首都大学東京）からの質問

ドーマになることについて

長岡さんのご発表を聴きながら、自分がその場に生活していたら、と想像した。そして、こうなったら、いっそドーマになってしまった方が楽なのではないか、とってしまった。トリカブトを飲みたくないし、「いつ毒を盛られるんだろう」とドキドキして生きているよりも、「もうドーマになっちまえ」と思う人はいないのだろうか。そこで、ドーマに積極的になる、という可能性についてお聞きしたい。人々がドーマになる経緯として、遺伝的理由や、一緒に住むなどの要因が挙げられていた。しかし、ドーマとは、必ず「ならされる」ものなのかお聞きしたい。ちなみに、ドーマ同士は毒を盛らないのか、という点も気になる。もしドーマ同士で盛り合うのだとしたら、結局トリカブトを飲まなければならなくなってしまうので。

長岡：実際に現地にいると、ドーマと疑われている人たちがとても多い。しかし、本人はドーマとっていない。薬師のもとには、ドーマと噂されている人も薬をもらいにやってくる。このようにもうすべてが曖昧な状況がある一方で、ドーマは確実にいるという風に言われる。「ドーマになれば楽」というのはたしかにその通りかもしれない。というのも、みんな本当に毒盛りにおびえて暮らしているから。でも、実際にはそのように語る人はいなかった。ドーマになるということは、その人が前世で悪いことをしてしまった結果が現世にあらわれたためと言われていて、ドーマ自身に原因があるわけではないためドーマは完全な悪者とは考えられていないところがある。それに、前世の影響を受けているという点ではみんな同じで誰もが（現世や来世で）ドーマとなりうる状況のなかで生きている。ドーマをめぐる複数の考え方が交錯しながら人びとはドーマと共存しているというのが現状だといえる。

「毒」に関する名前と漁の成功

大石さんのご発表に関して、魚が人に妖術返しをしているという視点がすごく興味深かった。しかし、大石さんが魚毒漁に行きたかったのに、からかわれて置いていかれたというお話には、人々の対応について納得がいかなかった。大石さんは「モンゴンボ」という魚毒植物の名を付けられたはずだ。なのに、その人を置いていってどうするのだ、と思った。魚毒植物としての大石さんの存在が漁の成功を活性化させるというか、成功や luck をもたらす存在になると考えられてもいいのではないか。（バクウェレの社会では）名前が重要な意味を持っているような印象を受けたので、「モンゴンボ」である大石さんをなぜ積極的に連れて行かなかったのか、名前と漁の関係についてお聞きしたい。

大石：お話しした顛末では、魚毒の採取に出かける直前にビスケットをかじってしまったた

めに魚毒漁の禁忌に触れてその部分には参加できなくなってしまったということだった。その時は、ちょっとからかわれたというか、はめられたなという感じだった。要はそのときに子守りが必要だったというだけで、そんな深い意味はおそらく無かったと思う。その後の魚毒の準備とか漁そのものには参加できたのだが。ただ、結果的から言えば、そのときの漁は不漁だったので、それは僕を連れていかなかったせいかもしれない（笑）。

○小林 竜太氏（川口市教育委員会）からのコメント

「毒」と向き合う技法、「毒」がもつ時間性

このシンポジウムの重要なキーワードとして、「毒」と向き合うテクニック、テクノロジー（技術知識）と、「毒」がもつ時間性を挙げるができる。利害関係という人と「毒」の関係があって、しかも「利」と「害」という2側面が出てこなかった発表は一つも無かった。だからこそ、（コメンテーターから）解毒、すなわち「毒」を取り除くテクニックに関するご指摘もあったのだと思う。私の専門は考古学で、一万年前から6000年前までの人間を対象にすることが多い。たとえば縄文土器によって、えぐみが強いトチの実など、そのまま食べると下痢になってしまうものを煮沸して、解毒して食べられるようにする。従って、「毒」とテクニックとの関わりには物質的な側面と同時に、非常に長期的な時間の流れが存在する。

もう一つは下田さんのご発表にあった通り、「毒」と向き合うための技術がある。長い時間をかけて、不可避であって組み込まれてしまった「毒」とどう向き合っていくのかということに関して、テクニックを獲得してくるという過程があったのではないか。それはもはやテクニックと言うより、生き方や死生観を見つけるというレベルの方がじっくりくと思う。利害関係として、そもそも「害」があると認定されて初めて「毒」になるので、組み込まれた時点で利害がある限り、それに対する技術というものがやっぱり人間社会には必要なのではないか。

そして関山さんのご発表にあったように、テクノロジー、技術知識のちがいでいうものが「毒」の認識に違いを与える。おそらく我々からすれば悪いだろう、悪影響があるだろうという部分が実際に症状として出ないとなったときに、前提となる知識やテクノロジーの違いというものが、「毒」の顕在化に大きく関わってくる。グローバルな状況下において、異なる「毒」の知識をもつ人たちが、ある一つの現象を援助したり解消するときに、「毒」をどう扱うのかということが、テクノロジーに関わる一つの問題としてある。

時間軸に関して言えば、「毒」というものに時間があるからこそ、テクニックが生まれてくるという側面がある。大石さんのご発表のなかには、魚毒を一日置いたことによって、毒が効果を失ってしまったのかもしれないというお話があったが、特に自然毒に関しては、「毒」の賞味期限のようなものがあると思う。農薬はかなりもつと思うが、それでも永遠に毒性を維持する「毒」は無いと思う。今回はバイオの「毒」があんまり組み込まれ

てなかったが、一つはそういった側面が、効果が出る／出ないということに強く関わってくるのではないかと。もう一つの時間軸として、枯葉剤のお話のなかにあったように、慢性的なもので摂取する前と摂取した後の時間軸がある。この時間軸は、ゆっくりと効果が現れるということそれ自体も見えずらくなるということや、症状というものにバラつきが出るということにも大きく関わってくるのではないかと思う。

下田：コメントのなかに、「毒」の時間性を考えるときに、今回のシンポジウムでは toxin が多くて venom が少なかったのではないかとのご指摘があった。生物から分泌される「毒」の時間性、採取されて加工されて、その後どうその姿かたちを変えていくのかという問題だと思うが、それに関しては大石さんに、生き物から分泌される毒 (venom) の時間性についてお応え頂ければ。

大石：今日の私の発表は、人間からみれば、venom で venom を持っているものを抑えるという話だったと思う。賞味期限というお話が出たが、それはすごく複雑で、魚毒漁にせよ、やはり生ものの現象としてとても複雑なかたちをとる。常に状況が変わっていくというか、そういう環境のなかで適用される venom として、魚毒漁のようなものはあるのかなという気がする。それから比較的安定した状況でつかわれる「毒」については、もう少し違った時間感覚というものが流れているのではないかと考えている。そういう意味で言うと、今日はお話できなかったが、農薬を使って魚毒漁をする場合のまさに剥き出しのやり方でケミカルに殺している感覚と、自然毒を使って、すなわち venom によって venom を倒すような魚毒漁をやっているときで、どのように実践感覚が違うのかという点は興味深い。ただ、農薬を使って行なう魚毒漁というのはあからさまに違法であるため、フィールドワーク的にはアプローチが難しいという現状がある。

下田：もう一点、先ほどのコメントのなかに「毒」と向き合うテクニックについてのご指摘があった。考古学は一万年前からの時間を扱うということをやっていたが、今回のご発表者のなかでは関山さんがロングタームの時間にも注目する人類生態学を専攻されている。人やモノの流動化が加速するなかでそれまでに無かった物質が入ってきたという時点から、もう少し時間を巻き戻していったときに、そこに住む人びとの身体が在来の「毒」に対して、長いあいだ人体と「毒」がインタラクションをくり返し続けてきたことで適応していくという側面もあったのかなと思う。それはテクニックと言えるかは分からないが、「毒」と向き合う技法の一つだとするならば、そのインタラクションとしてどんなことがあったのかということをお聞きしてみたい。

関山：インドネシアの例ではないが、人類生態学では、食文化による適応ということがよく言われる。たとえば、トウモロコシは、石灰水で下処理をすることによって、もともとア

ルカリが高くないところでは分泌されないアミノ酸(ナイアシン)が摂取できるようになる。そうすることで南米の人たちはナイアシン欠乏に陥らなくなった。一方で、在来の知識を知らなかった欧州の人たちは、それを食べたときにナイアシン欠乏になり、重大な疾病を発症したという事例がある。生物学的に「毒」への適性が高くなった事例は、あまり聞いたことがない。

大石:今日はバクウェレの人びとについて発表したが、彼らはピグミーという狩猟採集民と一緒に住んでいる。そしてピグミーはとても頻繁に喫煙をする。タバコを口のなかに入れていたり、半分舌の裏に入れてたりもする。その理由を調べているアメリカ人の共同研究者たちによれば、それは相対的なリスクの問題であるという。つまり、裸足で歩いていたり、森のなかにいることで、寄生虫などの感染症に罹りやすくなるが、喫煙することで駆虫効果が発揮される。したがって、共同研究者たちは、それを co-evolutional なプロセスとして理解できるのではないか、という仮説を立てて研究している。従って、進化的なプロセスという視点からは、相対的なリスクの問題によって「毒」を積極的に摂るということが起こりうるかもしれないという、そういう説明もなされている。

長岡:私の調査地であるヒマーラヤ社会では、食べ物を干すというテクニックがある。乳製品をはじめ、野菜、豆類でも何でも干してから食べるという、解毒というよりは、新鮮なものを「毒」化させないためのテクニック。最近開発が進んだことで、同地域にはゲスティックという慢性胃炎が広がっているが、病院の医者は、その理由を干して古くなったチーズや唐辛子を大量に食べたことに求めている。そのため、医者は干した食べ物は「毒」だから止めなさいという話をするが、現地の人びとは「そんなわけではない」と言って信じていない。その理由は、干すというテクニックが現地の人にとっては「薬」、あるいは「毒」化させないためのテクニックとしてずっとあったから。しかし、サイエンスの語りをする側はそれを「毒」のテクニックだと言う。そこで今すれ違いが生まれている。

棚橋:今日のご発表も含めて、「毒」には、魚を仕留めて食べるためだったり、あるいは人に恐怖を抱かせるものとしての「毒」、兵器としての「毒」の性格があり、「毒」をどの次元でみるかで、本当に色んな見方があり得るのだと思う。エスノグラフィックな、ローカルな「毒」について言えば、「毒」は微妙に中間的なところにあるという気がする。そして、「毒」はもしかしたらワクワクするものかもしれない。たとえばどこまでギリギリそれを楽しむかということも含めて、「毒」が導くワクワク感のようなものがあると思う。かくいう私もスモーカーで、いけないとは分かりながら吸っている。ローカルな文脈であれば、微妙な位置にある、「毒」なるものが持っている違う側面を議論し得るのではないか。しかし一方で、グローバルな「毒」が現れてきており、たとえばひどい「毒」になればサリンなどの化学兵器までいってしまう。Anthropocene のお話が何人かから出ている

が、たとえば Anthropocene を確定しようとしたとき、techno-fossil を何にするかということになってくると、私はアルミニウムか放射性物質のどちらかだと思う。だとすると、グローバルな「毒」というものは、人が生きていく痕跡としての「毒」の stratigraphy というか、放射性物質という害悪のあるモノが我々の生きていた痕跡になっていくという、皮肉にもなる。従って、今の時代というのはまさに、「毒」というものを手がかりにローカルな部分からグローバルなところまでを考え得る状況なのではないか。

○モハーチ ゲルゲイ氏（大阪大学）からの質問

身体内で作用する「毒」に関して、どのようなフィールドワークが可能なのか？

私は「薬」の研究をしているが、「薬」と「毒」は色んなところで重なっている。「毒」の特性として、身体の内側に在るモノであると同時に、社会のあらゆるレベルで差異化を起こすモノでもあるという点が挙げられる。その意味で、「毒」は「薬」と並び、社会性と身体性とを結びつけ、つなぐことのできる一つのテーマとして、民族学や人類学にとって非常に刺激的な対象ではないかと考えられる。

私たち文化人類学者は、その身体性と社会性の関係を、フィールドで追及しようとする。その調査はほとんど人の話を聴くことからなっていて、大石さんのように恵まれた環境であったら、一緒に「毒」を探したり、使うこともできるかもしれないが、フィールドで「毒」を使うという人類学者は少ないと思う。だとすると、私たちは結局、語りや言説、物語のようなものとして「毒」を追及しているのではないだろうか。「薬」の場合にもそうだが、そこには何か足りない部分があるような気がする。調査の過程では、その人びとがどういう風に自分たちの身体について語っているのか、ということ聴くが、それでも「毒」が効くのは身体の内側である。結局、人びとの語りや言説としてしか、「毒」の実際の効果や作用を追求することはできないところに、方法的な難しさがある。皆さんはそれぞれのフィールドでどのようにこの課題と向き合っているのか？ 民族学者・人類学者として、どういう風に身体の内側で作用する「毒」をそのまま追求できるのか？ たしかに調査後の分析・解釈のレベルにおいて、理論的には身体と社会とを結びつけることができる。しかし、実際のフィールドにおいて、人類学者としてどういう風に人の「身体の内側に入る」ことができるのか？

吉田：私は、フィールドワークを始めてすぐにノロウイルスに罹った。実は家族から感染したのだが、もう調査を始めていたということもあって、その日偶然にも生牡蠣を食べていた。そして罹った後は、ずっと吐き続けなければならなかった。そこで、ノロウイルスというのは、特効薬としての完全なワクチンがまだ開発されていないために、とにかく自分の身体から「毒」が出ていくのを待つしかないということに気づいた。先ほどの山口先生のコメントにもあったように、ウイルスがどこからどのように移動して私たちの身体の

なかに入り込んでくるのかが分からないという点が、Anthropocene における「毒」の考え方の一つなのかなと感じた。さらに、私の研究で言うと、海の酸性化も完全なる解毒はできないというところがあって、それに対してどういう風に適応していくのか、その適応においてどのような力が介入していて、もし牡蠣が自分で耐性を付けるのであれば、それはどういった過程においてなのかということを考えて。これは先ほどの「毒」のもつ時間性というところで考えていたことでもある。

山口: とても考えさせられるコメントだったと思う。それは、フィールドワークが追体験か、疑似体験かという問題と関連するかもしれない。特に私は歴史系なので、この世に生きていない人たちの体験を追体験することはできない。そこで何をやるかという、できるだけ多くのプロクシー(proxyes)、すなわち代替指標になるものを揃える。コンテキストといってもよい。それは地球科学のデータであったり、あるいは実験結果だったり、そして過去の人が残した考古学的痕跡だったりする。プロクシーを出来るだけ多く揃えていくことによって、自分自身の解釈の蓋然性を高めてゆくこと、それがフィールドワークなのかなと思うことがある。下田さんが掲げていた「毒」のフィールドワークという第二のテーマは、実はこの点にあるなと今思い至った。

上杉: おそらく「毒」関係の研究している人がほとんど経験していると思うのは、現地で食べたり飲んだりしていると、たとえば枯葉剤の場合だったら、今は「毒」全体としてのレベルが低くだいぶ薄まっている状態ではあるが、それでも心配にはなる。ノロウィルスのリスクがあることを知ったうえで牡蠣を食べたり、トリカブトの「毒」が周りにたくさんある状況だったりということで、疑似体験的なことをしている。そして、その体験をどうやって知識として、自分の体験ではなく彼らの体験として考えるか、そこには危険性も含まれているのかなと思う。

大石: 私のフィールドだと、まずフィールドにかかわり続けるということ自体が、自分の体内に「毒」を貯めるということにつながる。それは何故かという、マラリアがあるために、アンチ・マラリアのドラッグを飲んで予防内服をしていく。それが3ヶ月、6ヶ月という長期のフィールドワークになれば、相当量の「毒」を自分のなかに入れた上で行なう、ということが前提となる。同時に、少し前にエボラ出血熱が100km、200km離れたところを出たという状況で、猿の料理が出てきたときに、箸を付けるかどうかということも問われる。あるいは、イヌイットの研究をしている人だったら、海生哺乳類に大量に溜まっていると言われていたような化学物質がある。そのときに、一緒にその生肉にかぶりつくかどうかということも問われる。そういう意味で、「毒」の研究をしていなくとも、フィールドワーカーとしてかかわり続けるということ自体が、「毒」と不可避的に向き合うことを余儀なくさせるという側面をもっているのではないか。

下田：身体内での経験が、研究者によって結局は語りや言説のようなものに還元されてしまうというご指摘があったが、そのときに「語りのようなもの」をどう捉えるかということも問題になると思う。アネマリー・モルが『多としての身体』で書いていたと思うが、語りをどう聴くかというときに、語りのなかに出てくる顕微鏡や血液のことというのは、ただ単にその人の頭の中でつくられた解釈ではない。語りのなかに身体やモノの痕跡、出来事の痕跡というのは散りばめられている。さらに、フィールドで実際に語りを聴くというときには、語りそれ自体も言葉だけで構成されているわけではなく、語る人の目とか身体の動きと一緒に構成されている。だとするならば、「語りのようなもの」、「言説のようなもの」それ自体も、別の視点から捉え直す必要があるのではないかという風にフィールドの経験を振り返って考えた。

棚橋：とある薬学の研究者の方が、若い頃の経験をどこかに書いていた。その研究者の方が東北大の薬学部にいたとき、いわゆる生薬とか、植物由来のものを研究している人たちは、みんなそれを実際に食べて、ギリギリになって、腫れてしまったりしながら研究していたのだと言う。それは自分の身体的経験としての「毒」の経験ということになるが、一方で、たとえばインドネシアやカメルーンの人たちが、身体内でどういう経験をしているのかという問題もある。確かに重要な視点だと思うが、非常に難しい。と同時に、違う視点で言うと、実は私も「毒」に曝されて日々生活している。そして二重にも三重にも人間が人為的に作り出した放射性物質を浴び続けている。しかも食べるものから、代謝不能なぐらい色んなものを日々摂取している。このように、日本での日常的な経験を見直してみると、自らも「毒」に曝され続けている身体であるということに気づくのではないだろうか。今まで「毒」のことはあまり意識しなかったが、このシンポジウムのコメントーターを依頼され、参加してみて、改めて「あっ、毒漬けだな」と思った。そういう意味で、現在の21世紀における Anthropocene のあり方ということを考えるときに、「毒」に曝されている身体としての自分という、そういう意味での経験を新たにみるということがきわめて重要であると気づいた。

○その他のコメント

「未来と過去の対立」について

「毒」が未来と過去の対立をもたらすという話が興味深かった。そこから、未来と過去の対立を生み出すのは「毒」だけなのかなと考えた。しかし、皆さんのお話を聴いていて、その理由の一端は、「毒」が人間社会に大きな影響を及ぼすからなのかもしれないと思った。それから、先ほど放射性物質の話が出たが、過去と未来の対立ということを考える上で、例えば東日本大震災で大きな影響をもたらした福島も一つの重要な事例になるのかなと思って聴いていた。それから時間軸というときに「大昔」と「今」という二つのだけ

Session III 「毒」をめぐる学際的な知の交差

の違いではなく、段々どうなってきたかと考えると、やはり物質的な「毒」というアプローチだけでは不十分なのかなと思った。ご発表のなかに、「毒」と言っても物質的な「毒」だけとは限らないというお話があったので、そう考えると、未来と過去の対立というのも重要なファクターになるのかなと思った。私はどちらかと言えば自然科学の方を勉強してきたのだが、今日の参加してみて、人類学的なアプローチというのはこういう話になるのかなと思って聴いていた。



●実施報告

Performance Report

1. 本シンポジウムのねらい

これまで「毒」は、医学や薬学、毒性学の枠組みのなかで語られることが多かった。人文社会科学においては、特に公害や環境汚染をめぐる問題に関して、加害と被害の実態、共同体の再編、市民性の変容、社会運動及びそれをとり巻くグローバルな政治経済状況などが明らかにされてきたものの (e.g. Shkilnyk 1985; Reich 1991; Das 1995; Petryna 2002)、「毒」それ自体は、その毒性によって特徴づけられる所与の存在として扱われる傾向にあった。さらに、その成果が異分野間で十分に共有されてこなかったことも問題である。これに対し、本シンポジウムでは、「毒」のバイオグラフィー、すなわち「毒」という存在がダイナミックに変成・転換してゆくプロセスに焦点を当て、フィールドワークをその手法とする多様な学問領域のあいだをつないでゆくことによって、「毒」の新たな相貌を描き出し、現代世界をとらえる新たな視角の捕捉をめざした。

2. 各セッションの概要

セッションⅠ：あわい（間）を生きる「毒」

フィールドワークの時間という比較的短期のタイムスケールのなかで、毒／薬、贈り手／受け手、生／死、可知／不可知、人／動植物といった二項の境界を生きる「毒」のバイオグラフィーに光が当てられた。まず、長岡は、インド北東部のタウン社会における「毒盛り」の実践を検討し、人びとの身体だけでなく、ケガレや呪術をめぐる諸観念、あるいは薬とも密接に関連しつつ、その姿や社会関係を変えていくリミナルな存在として「毒」を描き出した。続く大石は、カメルーン東南部において集団で行なわれる魚毒漁の検討を通じて、在来の野生植物から有毒物質を採取・加工し、魚を捕獲し、その成否を解釈するという人びとの一連の身体的営為のなかで、「毒」を介した植物—人—魚のあいだの相互作用が、森や水域の状況とも連動しながら刻々と変化していくプロセスを明らかにした。吉田は、宮城と東京を主なフィールドに、人にとって「毒」となるノロウイルスの増殖と、牡蠣にとっての「毒」である海洋の酸性化という異種のあいだの二つの「毒」の現われを分析することで、地球規模の気候変動のみならず、ローカルな環境やそこに住む周辺生物、競合する研究成果、漁業や「食」をめぐる状況とも関連しながら姿かたちを変え、不安定で不確実なネットワークを紡いでいくアクターとしての「毒」を描き出した。

セッションⅡ：「毒」の新たな相貌

文献資料もふまえながら、より長期のタイムスケールのなかで、現代世界における「毒」のバイオグラフィーを捉えようと試みた。ここでは、ときに権力とも結びつきながら、私たちの日常生活のなかに密かに侵入する「毒」に光が当てられた。まず、関山は、インドネシ

ア・チタルム川流域の村落社会において、他地域との活発な物質的・人的交流を促してきた市場経済化の流れのなかで「毒」が複合的な汚染のなかに紛れ込み、汚染された村落景観が喚起する「毒々しさ」や住民の自覚症状とは裏腹に、数値としては顕在化しない「毒」のありようを指摘した。続く下田は、熊本県の水俣芦北地方において水俣病と共に生きる人びとのライフヒストリーに光をあて、国家主導の医療体制や支配的な言説の圧倒的な影響力の下、「毒」という統御不能な他者を対話の相手として独自に「消化」し、さらには倫理的な指針を得るための糧として「昇華」していくという生存の技法を指摘した。上杉は、ベトナムのアルーイ盆地においてベトナム戦争後長期間にわたって枯葉剤による被害が集会的な記憶として語られてこなかった背景として、1960年代末を画期に、複数集団の比較を通して統計学的に捉えられる少量の服毒の長期的影響や慢性症状、世代を超えた影響という新たな「毒性」が見いだされてきたプロセスを指摘した。

セッションⅢ：「毒」をめぐる学際的な知の交差

まず、コメンテーターである棚橋訓が、文化人類学の立場から、「毒」にも「薬」にもなり得る生物活性物質が、人間（社会）において何を活性化／不活性化するのかと問うことの重要性を指摘した。その上で、セッションⅠの各発表からは、「毒」が、社会関係（長岡）、社会のあり方（大石）、異種間の不安定なつながりや不確実性（吉田）を活性化している側面を、セッションⅡの各発表からは、「毒」が、食品生産のプロセス（関山）、人と生きもののあいだの贈与関係や地域社会における生のあり方（下田）、成長という生命過程（上杉）を不活性化している側面を主に看取できるとし、6つの発表を一つの糸でつなぎ得ることを示した。加えて、活性化の働きと同時に、異なるレベルにおいては不活性化の働きも生じていることが示唆された。

続いて山口徹が、歴史生態学・考古学の立場から、①「毒」による社会の差異化、② Anthropocene（人新世）とリゾーム的なネットワーク、③過去と未来が対立するような時間性を生み出す「毒」、という3つの視点の重要性を示した。その上で、①の視点から、「毒」の効果と村人たちの功德の多寡の関連付け（長岡）、「毒」に関する民族植物学的な知識の変化（大石）、枯葉剤被害の症状の秘匿（上杉）が社会関係の差異化と結びついている可能性を指摘した。また、様々な物質がグローバルに拡散していく状況下において、ローカルな人びとが生み出す複層的・突発的で不安定なつながり（吉田）、水系を通じた化学物質の拡散やそれがもたらす被害の不安定性（関山）を②の視点でみていくことの意義、さらには③の視点から、未来と過去の対立を解毒するための具体的な試みとはいかなるものなのか（下田）を問うていくことの重要性を示した。

その後、フロアも含めた総合討論のなかで、主に、「毒」と向き合う技法と「毒」がもつ時間性をいかに捉えるか、身体内で作用する「毒」に対しどのようなフィールドワーク手法があり得るかということについて議論が交わされた。なお、当日は研究者だけでなく、一般の方々も含め計24名の方にご来場頂いた。

3. 本シンポジウムの成果

以上を踏まえ、本シンポジウムの最大の成果は、「毒」を通して現代世界を考えることの意義を多面的に示すことができた点にある。さまざまな「毒」のバイオグラフィーを通して、「毒」は単なる有害物質ではなく、人と人、異なる種、身体性と社会性のあいだを横断するのみならず、グローバルなネットワークのなかでローカルな人間（社会）を活性化／不活性化させ、様々な時間の感覚を生み出し、かつ時間の流れとともにその姿かたちを変えていくダイナミックな存在として描き出された。このことは、「毒」という存在が、活性化／不活性化、生／死、生命／物質といったように「機能的に分断されたのではない、全体的な存在者のふるまい」（モース 2014: 444）、すなわちホリスティックな生のありようにアプローチしていくための重要な手がかりとなることを示唆している。そして、その理由の一端は、「毒」が「薬」になり得ること、すなわち両義的な力をもつ媒介項であることに求められるだろう。と同時に、「毒」をキーワードに据えることで、医療（長岡）、食と環境（大石、吉田）、人為的な災害（関山、上杉）、身体と記憶（下田）といった現代世界において重要な意味をもつ諸テーマを、それぞれ別個にではなく、結びつけながら議論し得る可能性を示すことができたのではないだろうか。

また、各発表者が示した通り、「毒」はそれ自体が働きをもつという意味で、ラトウールの言うアクター（行為者）として捉えることができるかもしれない（cf. ラトウール 2008）。ただし、本シンポジウムの成果を鑑みれば、「毒」をその他のあらゆるモノ（非人間）といっしょくたにしてしまうこと、及び「毒」と人を同等なアクターとみなすことには疑問の余地が残る。「毒」は生物活性を持ち、人間を含む様々な生きものの生命に対しときに予期せぬ効果さえ及ぼすという点で、たとえば実験室のフラスコやビーカーとは明らかに異なる存在と言える。そして、生命に活性化／不活性化の働きを及ぼす両義的な存在であるがゆえに、かつその効果が予期されざるものであるがゆえに、社会的・文化的な変化を生じさせる重大な要因にも（関山、上杉）、社会関係の再編を促し（長岡、大石）、異種間の不安定なつながりを生み出す（吉田）契機にもなり得るのだと考えられる。さらに、人間の身体との関連で言えば、「毒」に従属させられる身体に対し、生活者として人間の生を取り戻すための闘い、すなわち誰が主導権を握るのか、誰が存在を決めるのかということをめぐる闘いが展開される場合もある（下田）。

趣旨で述べたように、かつて両義的な性格を有していた「毒」=pharmakon は、近年の環境保全をめぐる言説やリスク論的な見方において、削減・除去すべきもの、あるいは忌避すべき対象として扱われるようになってきている。J. デリダは、「毒」=pharmakon から毒=有害物質への変化の要因を、「両義性の潜在的資源」を無に帰し、「暴力的に破壊する分析効果」を及ぼしてきたプラトン以後の西洋形而上学に求めている（デリダ 2013: 150-153）。また、B. ラトウールは、近代科学における存在論を、人間／非人間、文化／自然、主体／客体という二つの領域に整然と切り分ける「純化」（purification）の働きによって特徴づけている（ラトウール 2008: 27）。これらの指摘は、「毒」という媒介項がもつ両義的な力を

直視していくことの重要性を陰画として浮かび上がらせる。それはおそらく、M. ダグラスがアフリカのレレ族による豊穡儀礼に見いだしたように、潔淨（清め）を過度に追求するのではなく、一度拒絶されたもの・忌むべきものを「新しい生命のために再び土に鋤き」込み、「それらをして善きものを生むための能力たらしめる」ような「汚物肯定型」・「堆肥型」の哲学を発展させていく道にも通じているのだと考えられる（ダグラス 2009: 314, 365-378）。

4. 今後の課題

今後の課題は、第一に、「毒」をキーワードにしたフィールドワーク手法をめぐる議論を精緻化させていくことである。総合討論における指摘にあったように（本書、p. 21）、身体内で作用する「毒」に対していかなるフィールドワークがあり得るのかということに関して、本シンポジウムの特徴でもあった学際性を活かしながら、議論をさらに深めていく必要がある。第二に、Anthropocene（人新世）をめぐる議論のなかに「毒」の研究を位置づけていくことである。人新世という指摘の要点の一つは、遠い未来の地質学者たちが近年の人間活動の痕跡をいかなる形で見いだすのかという問い、すなわち、未来から「今」を問い直す視点にあると考えられる。この意味で、数千～数万年というタイムスケールが重要になると同時に、長期間にわたる環境史をその物質的側面から探求する考古学者・ジオサイエンス系の研究者との協働によって、「毒」の現在的な痕跡を学際的に追跡するフィールドワークも可能性として浮かび上がってくる。

なお、本シンポジウムを通じて得られたネットワークは継続的に活用し、本テーマでの研究会のさらなる開催、国内外での学会分科会の組織、共同研究の立ち上げ、ワーキングペーパー・特集論文の執筆、論集の公刊といった成果につなげていく予定である。

（文責：下田 健太郎）

参考文献

- ダグラス, M. 2009 『汚穢と禁忌』（塚本利明訳）筑摩書房。
- Das, V. 1995 *Critical Events: An Anthropological Perspective on Contemporary India*. New Delhi: Oxford University Press.
- デリダ, J. 2013 『散種』（藤本一勇ほか訳）法政大学出版局。
- ラトゥール, B. 2008 『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』（川村久美子訳）新評論。
- モース, M. 2014 『贈与論 他二篇』（森山工訳）岩波書店。
- Petryna, A. 2002 *Life Exposed: Biological Citizens after Chernobyl*. Princeton: Princeton University Press.
- Reich, M. R. 1991 *Toxic Politics: Responding to Chemical Disasters*. Ithaca: Cornell University Press.
- Shkilnyk, A. 1985 *A Poison Stronger than Love: The Destruction of an Ojibwa Community*. New Haven: Yale University Press.

●謝辞

Acknowledgement

本シンポジウムを開催するにあたって多くの方々のご協力を賜りました。棚橋訓先生（お茶の水女子大学）と山口徹先生（慶應義塾大学）には、企画段階から数多くの貴重なご助言を頂きました。小花紀子氏（Fieldnet 事務局）は、細やかなサポートを通じて本企画の運営を支えてくださいました。佐山のの氏（国立音楽大学楽器学資料館）、臺浩亮氏（慶應義塾大学文学研究科）には、シンポジウム当日の会場運営を担当して頂きました。何より、議論を実りあるものにしてくださったご発表者にご来場者の方々なくして、本シンポジウムは成立しませんでした。末筆ではありますが、この場を借りて深く感謝申し上げます（編者）。

なお、本シンポジウムは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の「2016 年度フィールドネット・ラウンジ企画」の公募による助成を受けて行なわれました。

※本報告書の内容は、それぞれの著者および編者の著作物です。

This report is copyrighted by each authors and editor.

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

2016 年度フィールドネット・ラウンジ企画 シンポジウム 報告書

『「毒」のバイオグラフィー——学際的な知の交差を通じて現代世界のフィールドワーク手法を考える』

発行日：2017 年 2 月 28 日

編者：下田 健太郎